

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520299

研究課題名（和文） 現代文学における言語的奇想の系譜——その背景・特質・射程

研究課題名（英文） Language Experiment in the Modern Literature : its Background, Characteristics and Range

研究代表者

國分 俊宏 (KOKUBU TOSHIHIRO)

青山学院大学・国際政治経済学部・准教授

研究者番号：70329043

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、20世紀前半のフランス文学において、言語実験的作品を書いた作家たちのうち何人かを取り上げて、その背景、特質、射程を検討することであった。具体的にはレーモン・ルーセル、ゲラシム・ルカ、ジョルジュ・ペレックの三人を取り上げた。初年度においては、秋に一度、フランスへの研究出張を行い、資料収集に努めた。特にゲラシム・ルカに関連して、ルーマニア・シュルレアリスム関係の古雑誌などのコピーを手に入れた。またその際、特異な文体で知られる現代フランスの作家フランソワ・ボン氏と面会し、インタビューを行った。ジョルジュ・ペレックの資料が所蔵されるアルスナル図書館を紹介していただいたのもボン氏である。第2年度は、ルーセル、ゲラシム・ルカに関する論文をそれぞれ一本ずつ執筆した。この2本の論考は、1年遅れで翌年せりか書房より『ドゥルーズ 千の文学』（宇野邦一・堀千晶・芳川泰久編著、2011年1月発行）の中の分担執筆分として刊行された。また夏に一度、フランスへの研究出張を行った。その際、フランスにおける若手のペレック研究の第一人者であるソルボンヌ大学教授のクリステル・レッキアーニ氏と面会し、関連文献をコピーさせていただくなどした。最終年度には、「レーモン・ルーセル：言葉と物」のタイトルで学会ワークショップを開催したほか、シュルレアリスムの詩人ポール・エリュアールやレーモン・ラディゲらの翻訳をした日本のモダニズム詩人北園克衛を軸に、日仏の言語実験詩人の比較研究にも手をつけた。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to examine some authors in the modern French literature whose works are mainly produced by language experimental operation. To be concrete, I took up three novelists (or / and) poets : Raymond Roussel, Gherasim Luca and Georges Perec. In the first year, I went to France to do research and to gather materials and documents. I gathered especially the literature concerning the Romanian Surrealism which Gherasim Luca initially belonged to. On that occasion, I also met François Bon, famous French author, known by his unique style. I had an interview with him and he introduced me to the Bibliothèque de l'Arsenal, who possesses a precious collection of Georges Perec's Documents. In the second year, I wrote two articles about Raymond Roussel and Gherasim Luca. These two articles were published in the following year in *Deleuze, mille littérature* (edited by Kuniichi Uno, Chiaki Hori, Yasuhisa Yoshikawa, Serika Shobo, January 2011). I did, for the second time, a research trip to France too, and I held an interview with Christelle Reggiani, professor at Sorbonne University. Although young, she is a recognized authority on Georges Perec studies. In the third and last year, I gave a presentation on Raymond Roussel at the Workshop of the Japanese Society of French Literature. In addition, I expanded my subject to a comparative study on experimental poets between Japan and France, especially Kitazono Katsue who translated the works of Paul Eluard or Raymond Radiguet.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：フランス文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：仏文学、文学一般、言語実験、言語遊戯、モダニズム

1. 研究開始当初の背景

「二十世紀前半の芸術をどのように眺めわたしてみても、この時期が多くの特で実験の時代であったという結論を避けるわけにはいかない」とC.M.パウラは1949年に刊行された著書『現代詩の実験』の中ですでにそう書いている。20世紀前半の文学、いわゆるモダニズムの文学の特徴の一つを、その前衛性・実験性にみることは、広く周知のことからであると言ってよいだろう。中でもフランスにおいては、シュルレアリスム運動を中心に、詩や散文の領域において、言語実験的な作品が目覚ましい展開を見せたことは、広く認められている事実である。また、その源流を19世紀後半のマラルメらの象徴主義文学運動に結びつけることは、多少の異論はあるにせよ（たとえば前出のパウラは、マラルメとその後の20世紀前半の実験詩とを明らかに断絶したものととらえている）、今では多くの研究者が一致してほぼ認める考え方だと言ってよいだろう。ただしその理由は、19世紀末の象徴主義運動が、現実とは離れた、純粋に言語自体の音響特性やリズム、意味の世界（すなわち虚構の世界）によって自律する作品、いわゆる「純粋詩」を目指したところに、その後の言語実験的作品の萌芽を見て取るというのが、大勢であった。いずれにせよ、言語実験的文学は、現実から多かれ少なかれ遊離した、一種の虚構の遊戯のごときものとして（その範囲の中で）尊ばれ、研究されてきたといえる。

2. 研究の目的

上で述べたように、19世紀末の象徴主義文学運動が、言語自体の自律性を旨とし、「純粋詩」を目指したところの延長線上に、20世紀初頭の前衛芸術運動における実験詩も位置づけられている。本研究は、そのことを全面的に覆そうとするものではないが、むしろ言語実験が、単なる「純粋言語」の実験に

とどまるのではなく、その作家たちののっぴきならない現実の生と深くかかわるかたちで生み出されているのではないかとの観点に立ち、言語遊戯と「書く私」、言語と現実との関係を探ることを目的とした。すなわち本研究の目的は、言語実験的文学を、その作家たちの生とのかかわりの中において（より具体的には、彼ら自身の「書く私」へのこだわりにおいて）探究することにある。そのことをつうじて、20世紀の言語実験文学に、これまでとは違う意味づけを与えることがもう一つのねらいである。

3. 研究の方法

研究方法については、研究対象として定めた各作家の作品を広く収集し、それを個別に深く、また横断的に広く、読解していくことを主とした。その際、対象と定めた作家以外の文学者らの作品や理論なども適宜参照することも避けなかった。特に「私」の問題については、近年いわゆる「自伝文学」やオートフィクション（自伝的虚構）についての研究が盛んであることから、最近の成果から学ぶべき点は多かった。資料収集に関しては、初年度と二年目にそれぞれ一度ずつ渡仏し、日本では手に入れにくい雑誌のコピーなどを入手した。日本にいるあいだには、資料の読解を主とした研究活動に努め、また知人の出版関係者らを通じ、できうるかぎり、当該研究に関係する作家や作品などの紹介・翻訳が日本において出版できないか、交渉し、広く本研究の成果が伝えられる方法を探った。

4. 研究成果

本研究の当該研究期間における研究代表者の発表論文等の成果は、以下の欄に記載するとおり、2本の雑誌論文、3度の発表、2本の分担執筆図書であるが、ここでは研究活動の経緯等を、各年度ごとに追うかたちで祖述する。

当該研究期間初年度（2008年度）においては、まず研究対象とするコーパスを定めるため、広く文献収集を行った。当初は、ミシェル・レリス、レーモン・クノー、ボリス・ヴィアンといった作家たちも念頭に置いていたが、研究・調査を進めるうちに、ある程度の絞り込みが必要との判断に達し、レーモン・ルーセルを中心にゲラシム・ルカ、ジョルジュ・ペレックらを特に取り上げることに決めた。ルーセルとゲラシム・ルカは、広い意味ではいわゆるシュルレアリスムの芸術運動にかかわる作家・詩人たちであるが、どちらも狭義の「シュルレアリスト」（つまりアンドレ・ブルトンらが起こした運動に直接かかわったメンバー）ではないという点も共通している。シュルレアリスムは、ルーマニア出身のトリスタン・ツァラが創始したダダイスム（初めチューリッヒで、次いでパリで）をいわば引き継ぐようなかたちでパリに始まったものだが、ダダイスムが大胆な言語破壊や言語実験を繰り返したのに対し、シュルレアリスムは、言語実験という面では、むしろ前衛性は薄かったように見える。言語実験の特色を強く持っていたのは、むしろルーセルやゲラシム・ルカのような周辺の詩人たちだった。

ゲラシム・ルカもまたルーマニア出身の詩人であり、初めはルーマニアでシュルレアリスム運動に参加していたが、やがてパリに活動の場を移した。その初期の代表的な詩「Passionnément（情熱的に）」は、pas というフランス語の否定の助辞を効果的に使った音響実験的な詩であり、ルーマニア語ではなく、フランス語で書くことによって初めて成立したものだった（ルーマニア語には否定の pas という語はない）。

1994年にセーナ川に身を投げて自殺するゲラシム・ルカの私生活は、いまだ多くの謎に包まれているが、その言語実験詩は、単なる遊戯であるという以上に、詩人自身の生の軌跡と深く結び合うかたちで生み出されてきたものであることは間違いない。「これ」でしか書き得ないという切迫した迫力がその独特の言葉のパフォーマンスには漲っているからである。

この初年度、10月16日 - 19日にはパリに研究出張を行い、資料収集を行ったほか、特異な文体で知られる現代フランスの作家フランソワ・ボンと会見し、意見を交わすことができた。その際、パリのアルスナル図書館にあるジョルジュ・ペレック関係の資料の存在を教示していただいた。

この初年度において収集した雑誌文献などのうちゲラシム・ルカに関するコピーの一部を挙げておく。

- Fusée 7, Editions Carte Blanche, 2003
- Le surréalisme en 1947

- Ce château pressenti, 1958
- Trost, Vision dans le cristal, 1945
- Trost, La connaissance des temps, 1946
- Trost, Le profil navigable, 1945
- Infra-Noir, 1946
- Le Rameau d'or, no.2 Le surréalisme roumaine, 1996

第二年度（2009年度）には、引き続き文献収集を行ったが、言語実験と「書く私」というテーマがより鮮明になってきたのは、この頃からであった。

ルーセルとゲラシム・ルカについては、せりか書房から『ドゥルーズと文学』（仮題）という共同著書を出版する企画があり、そこに参加させていただく形で、私もその中で、主にフランスの哲学者ドゥルーズとのかかわりを中心に、ルーセルとゲラシム・ルカに関する論考をそれぞれ一本ずつ執筆した（11月末に送稿）。この本は一年遅れて翌2010年中に出版されることになった（実際の刊行奥付は2011年1月）。ほかに、雑誌『思想』（岩波書店）のシュルレアリスム特集号に掲載するためアンドレ・ブルトンらに関するフランス人研究者による論文を2本翻訳したが（7月末送稿）、この特集号については、残念ながら延期となり、この報告書執筆現在もまだ刊行のめどが立っていない。

ペレックについては、日本の出版社インスクリプト社から刊行される予定で、遺作『53日』の翻訳作業にとりかかった。また、9月2日 - 7日にパリ出張を行い、若きペレック研究者でペレック協会事務局長でもあるソルボンヌ大学のクリステル・レジアーニ氏と面会し、その協力を得てパリ・アルスナル図書館での資料調査を（3、4、5の三日間）行った。ルーセル、ルカ、ペレックいずれにも共通するのは、「書く私」もしくは自伝の問題である。なぜ言語の問題は「私」もしくは「自伝」の問題になるのか、そのことを頭に置きつつ、言語遊戯を言語表現全体の問題として問い詰めること、という本研究の課題が、この一年を通してより浮き彫りになってきたと言える。

上記パリ出張の際に手に入れた資料のうち、ペレック関係のコピーの一部を上げておく。

- Bernard Magné, « 53 jours pour lecteurs cheveronnés », *Etudes littéraires*, vol. 23, 1990
- J. Roubaud et J. Neef, « Entretien à propos de 53 jours de Georges Perec », *Littérature*, No. 80, 1990
- *Le Cabinet d'amateur*, no. 1, 1993
- Bulletin de l'Association Georges Perec 数冊

最終年度（2010年度）には、引き続きレーモン・ルーセル、ゲラシム・ルカ、ジョルジュ

ユ・ペレックを中心に研究を進めた。最後の年度となるため、新たな資料収集というよりもこれまでの成果をとりまとめることに中心をおいた。フランスへの研究出張も行わなかった。本研究の中心的な問いは、言語実験的な文学が、書くという行為の本質とどのようにかかわるのか、ということであった。

ルーセルとペレックに共通するのは、ともに言語実験に深い興味を持ちながら、同時に一人称によって「私」について書くという形式にもこだわった点であった。言語実験と自伝的な語り、一見正反対にも見えるこの二つがどうかかわるのか、を検討することには大きな意義があると考えている。

10月17日、南山大学で行われた日本フランス語フランス文学会の秋季全国大会において、「レーモン・ルーセル：物と言葉」のテーマで、新島進（慶應義塾大学准教授）、永田道弘（大分市立芸術大学准教授）、谷口亜沙子（獨協大学専任講師）の3氏とともにワークショップを開催した。新島氏がルーセルとハンス・ベルメール、永田氏がルーセルとジョゼフ・コーネル、谷口氏がルーセルとミシェル・レリスとの関連で発表する中、本研究代表者の國分俊宏も「レーモン・ルーセルと物」のタイトルで発表を行った。これは、ルーセルにおいて言葉自体が「物」のように扱われること、そしてルーセル自身私生活で物に執着する傾向があることに着目し、言語遊戯、物、ルーセルの生のあり方、という三者の関係を考察したものである。

大会終了後、学会の会報に寄せた報告書の國分担当部分を以下に転載しておく。

// 國分は、ルーセルの作品に夥しい数の「物」が登場することに着目し、言葉を「物」のように操作するルーセルの創作手法（プロセデ）と事物への執着にはどういう関係があるのだろうか、という問いを立てるところから出発した。ルーセル作品において「物」はまず描写の対象として登場する。またその「物」の来歴（エピソード）が語られることも多い。詳細な描写と入れ子状になったエピソードの並列はルーセル作品に見られる二つの大きな特徴だが、ちょうどプロセデが言葉をよりどころにして物語を編み上げる方法であると同様に、ルーセルは「物」をよりどころにして物語を進めている。そこにはある種の平行関係があると言える。もう一つ重要なことは、ルーセルの世界に現れる「物」は現実世界とフィクションとをつなぐはたらきをするようなものではなく、むしろ虚構を強めるようなはたらきをしていることである。たとえそれが現実世界に参照項をもっているような実在の事物や人物であったとしても、現実とつながりをもった物ではなく、虚構としての物であるように思われる。そのことを強く示唆するのが、ルーセルの作品世

界の「物」にしばしば言葉（文字）が書かれていることである。スエードの手袋に文字が写ってしまったり（『アフリカの印象』）、頭蓋骨に文字が書かれていたり（『ロクス・ソルス』）といった例は数多く挙げられる。言葉の本質が虚の空間を立ち上げることでありとすれば、ルーセルの「物」には虚の刻印が押されている。実際、ルーセル作品において「物」の逸話が入れ子状に増殖していくとき、「物」は一種の「現実効果」を持つのではなく、むしろ虚構性の度合いをますます強めていくはたらきを持つように見える。逆説的な言い方をすれば、言葉に執着するルーセルの作品に「物」が大量に現れるのは、その「物」が物ではなく、「言葉」でしかないからではないか。つまりプロセデを駆使するルーセルにとって言葉が「物」であったように、「物」もまた言葉だったのである。//（転載終わり）

また一方で、フランスの言語実験文学がどのように日本に移入されたかについても研究を広げ、特に日本のモダニズム詩人・北園克衛の翻訳詩に焦点を当てた論文を青山学院大学国際政治経済学会の研究誌に発表した（下記5参照）。

また、青山学院大、筑波大、フランシュ・コンテ大の共同開催で行ったセミナー「Conflict et Interprétation（衝突と解釈）」において、翻訳と言語遊戯の観点から発表を行った（下記5参照）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 國分俊宏、「詩の翻訳は何を伝えるか：北園克衛訳、ラディゲ「アルファベットの文字」をめぐって」、青山国際政経論集、査読無、第83号、2011年、pp.19-43、青山国際政治経済学会発行

② 國分俊宏、「反復としての翻訳」、青山国際政経論集、査読無、第80号、2010年、pp.61-81、青山国際政治経済学会発行

〔学会発表等〕（計3件）

① Toshihiro KOKUBU, *Communication comme miracle : comment la traduction est-elle (im)possible ?* 日仏共同セミナー « Conflict et Interpretation »（衝突と解釈）、青山学院大・筑波大・仏フランシュ＝コンテ大共催、2010年11月24日、於・青山学院大学青山キャンパス

② 國分俊宏、新島進、永田道弘、谷口亜沙子、「レーモン・ルーセル、言葉と物」、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会ワークショップ、2010年10月17日、於・南山

大学名古屋キャンパス

③國分俊宏、「詩の翻訳は何を伝えるか：日仏アヴァンギャルド詩人たちの言葉とイメージ」、日本比較文学会東京支部月例会、2010年9月18日、於・日本大学水道橋キャンパス

〔図書〕（計1件）（分担執筆）

國分俊宏、「レーモン・ルーセル 差異と反復の実践者」及び「ゲラシム・ルカ 痙攣する言葉」（『ドゥルーズ 千の文学』宇野邦一・堀千晶・芳川泰久編著、せりか書房、2011年、所収、pp.459-472）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

國分 俊宏 (KOKUBU TOSHIHIRO)

青山学院大学・国際政治経済学部・准教授
研究者番号：70329043